

## 弥生時代の播磨地域の道

禰宜田 佳 男

一 はじめに

道は、人が生きていく上で必要なモノを獲得するため、くり返しの移動によって自然発生的にできた。最初は陸の道だっただろうが、縄文時代には特定の石材を獲得するため海を渡る海の道もあったし、川を利用する川の道もあった。

本稿では播磨地域の弥生時代の道について考える。道の復元は、歴史地理学などの分野で進められ、例えば摂津地域と播磨地域の境界域を結ぶ道として、白河峠から伊川谷を経由するルートが想定され、弥生時代でも同じルートが機能していた可能性が指摘されている<sup>(2)</sup> (図1)。

残念ながら、こうしたミクロな視点による道の

復元は筆者の能力を超えたところにあるが、マクロな視点から播磨地域の川を使った道のルートを復元したことがある。そこで本稿は、すでに考えられている道と筆者が示した道によって移動したモノを整理し、改めて播磨地域の弥生時代の道について考えてみたい。

以下、検討対象は播磨地域とするが、必要に応じて三田盆地など周辺地域にも触れる。

弥生時代は早期・前期・中期・後期・終末期(庄内式期)と五つに区分する。前期など一つの時期を三つに分ける場合は、前葉・中葉・後葉、二つの場合は前半・後半とし、表の時期表記は弥生時代前期を 期、中期を 〵 期、後期を 期とする。

## 二 播磨地域における三つの道

兵庫県より西の地域では、現在でも日本海と瀬戸内海という東西の道と、二つの海を結ぶ南北の道が発達している。それは過去においても同様で、水田稲作は瀬戸内海を伝って播磨地域にもたらされ、内陸部にも広がっていったと考えられる。

そうした内陸部へのルートとして考古学的に著名なのが、佐原眞によって提起された「加古川由良川の道」である。そのルート復元で着目された銅剣形磨製石剣は、加古川流域で一例、由良川流域で二例と少なく、二つの川は標高二〇〇メートルを超えることなく瀬戸内海沿岸から日本海沿岸まで到達できる唯一の道だという地理的特徴を踏まえての指摘だった<sup>(3)</sup>。

その後、この道に関しては、播磨地域の弥生遺跡を整理するなかで喜谷美宣が取り上げた。銅剣形磨製石剣は加古川流域ではなく明石川流域で出土が相次いでいることを踏まえ、加古川本流とは別に、加古川から草谷川を経由し、明石川へ抜けるルートの存在を述べたのだ<sup>(4)</sup>。



図1 六甲山系西端の遺跡地図と推定交通ルート図（荒木2013）

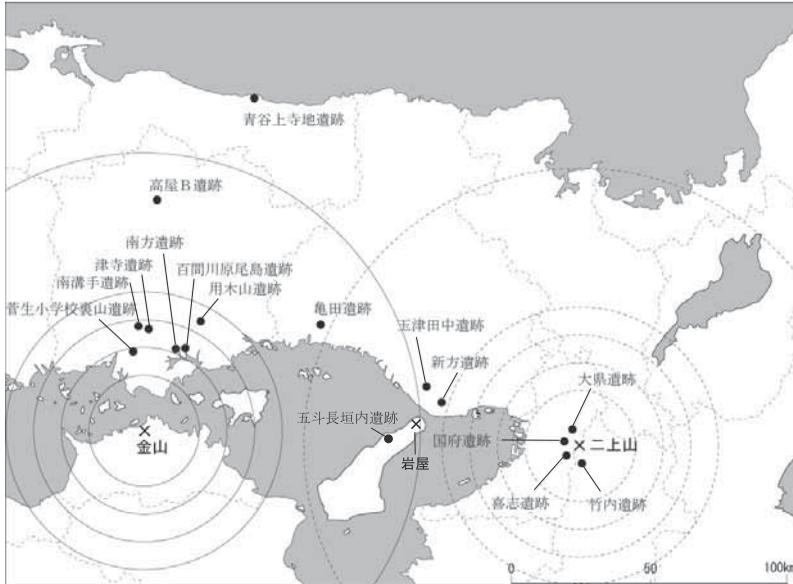


図2 サヌカイト原産地とおもな弥生遺跡分布図（禰宜田 2019）

さらに、種定淳介は加古川 由良川の道で移動した銅剣形磨製石剣・銅鐔・銅剣・分銅形土製品・土器及び方形周溝墓・多角形住居のあり方を整理した。そして、弥生時代中期には播磨系土器が加古川を遡上し丹後地域で出土していたのが、後期には近畿北部系土器が播磨地域に影響を及ぼしたこと、つまり、中期と後期では土器が影響を及ぼした方向が逆方向になったことを論じたのであった。<sup>5)</sup>

これらの研究を踏まえ筆者は、畿内地域の鉄器でもっとも遡る弥生時代中期中葉に、明石川流域でも鑄造鉄斧が出土し、鉄器は加古川流域より明石川流域で多く出土し、中期後葉には三田盆地でまとまった量の鉄器が出土することから、そこへの鉄器は明石川を遡上し草谷川、加古川を経由するルートの存在を改めて指摘した。<sup>6)</sup>

また、もう一つ、揖保川から智頭町を経て、千代川を北上するルートも存在したと考えた。詳しくは後述するが、たつの市域、鳥取県の松原田中遺跡で二上山産サヌカイト製打製石器（以下、二上山産サヌカイト）と言つ、「金山産サヌカイト

ト」も同様とする。)が、出土していたことに着目した。途中で未確認のところは多いが、播磨地域西部にも南北の道を考えたのだった。<sup>2)</sup>

このように、弥生時代の播磨地域には少なくとも三つの道があった。次節では、それらを移動したモノと変遷をみていこう。

### 三 考古資料の出土状況(表1)

#### (1) 石器

まず取り上げるのはサヌカイトである。これは奈良県と大阪府にまたがって所在する二上山と、香川県北部の金山が主要な原産地である(図2)。

播磨地域は、原産地からの距離をみると両者の間に位置する。明石川・加古川流域は二上山に、揖保川・市川流域は金山に近いが、基本的に金山産サヌカイトが主流だった。が、そうではない時期と地域があるので、この点は後で取り上げる。

二上山産サヌカイトは、播磨地域西部にも及んだ。大津茂川流域の太子町亀田遺跡出土の打製石鏃・打製石錐(第3図1・2)をはじめ、揖保川

流域のたつの市新宮宮内遺跡と寄井遺跡、家島群島の姫路市大山神社遺跡でも確認されている。

そのうち、二上山産サヌカイト製の畿内式打製尖頭器は南河内地域で製作され、完成品が流通したという点で打製石器の中では特殊な石器である。そのような石器が玉津田中遺跡(第3図3)、加古川上流域の丹波市七日市遺跡(第3図4)でも出土している。

銅剣形磨製石剣(第3図5)は、種定の集成以降、亀田遺跡で出土した(第3図6)。石材である粘板岩は畿内地域北方に原産地があり、その周辺で製作された製品が、明石川と由良川流域までは一般的だが、その西では稀薄となる。

#### (2) 鉄器

次は鉄器関係の遺構・遺物を取り上げる。弥生時代に鉄生産は始まっていなかったため、鉄器・鉄製品や鉄素材(以下、これらを総称する場合、「鉄器等」という。)は韓半島南部からの流通ネットワークによってもたらされた。

弥生時代中期中葉の鑄造鉄斧は、明石川流域の

	流域等	遺跡名	市町名	時期	石器		青銅器関係			鉄器等	備考
					銅剣形	二上山	銅鐸	その他	鋳型		
1	千種川	本位田権現谷A遺跡	佐用町	V						●	鉄器製作遺構
2		下本郷銅鐸出土地	佐用町					突			
3		平松五郎山銅剣出土地	佐用町					中細形			
4		別名前山銅剣出土地	上郡町					平形			
5		上高野遺跡	赤穂市	II~IV					銅鐸		採集品
6	揖保川	新宮宮内遺跡	たつの市	IV・V		○				●	
7		番井遺跡	たつの市	IV		○					
8		小神戸原遺跡	たつの市	IV						●	
9		亀田遺跡	太子町	III・IV	●	●				●	
10		聞賀銅鐸出土地	宍粟市					扁			
11		青木中井小谷銅鐸出土地	宍粟市					扁			
12		岩野辺字穴尾銅鐸出土地	宍粟市					突			
13		須賀沢銅鐸出土地	宍粟市					突			
14		名古山遺跡	名古山遺跡	姫路市	II~IV					銅鐸	
15	今宿丁田遺跡		姫路市	II~IV					銅鐸		
16	神種銅鐸出土地		姫路市					菱			
17	梅谷石剣出土地		姫路市			●					
18	島嶼	大山神社遺跡	姫路市	IV		●					
19	加古川上流	七日市遺跡	丹波市	I~IV		○					
20		棚原石剣出土地	丹波市			●					
21		野々間銅鐸出土地	丹波市					外・扁			
22		宮ヶ谷・長坂谷遺跡	多可町	III~IV	石戈	○					
23	加古川下流	上西条(望塚)銅鐸出土地	加古川市					扁			
24		坂元遺跡	加古川市	III~IV		○					
25		美乃利遺跡	加古川市	I~IV		○					
26	明石川	正法寺山銅剣出土地	三木市					中細形			
27		垂水付近石剣出土地	神戸市			●					
28		垂水区殺上銅鐸出土地	神戸市					扁			
29		玉津田中遺跡	神戸市	I~IV	●	●		細形			鑄造鉄斧斧柄
30		新方遺跡	神戸市	I~IV		●				●	
31		義田中ノ池遺跡	神戸市	II~IV	●						
32		頭高山遺跡	神戸市	IV	●	○				●	
33		西神NT第38地点遺跡	神戸市	IV	●						
34		西神NT第50地点遺跡	神戸市	IV		●					
35		西神NT第62地点遺跡	神戸市	IV						●	
36	表山遺跡	神戸市	V					仿製鏡			
37	三田盆地	北神NT第4地点遺跡	神戸市	IV		●				●	
38		有鼻遺跡	三田市	IV		●				●	鉄器製作遺構か
39		奈カリ与遺跡	三田市	IV		○				●	鉄器製作遺構か
40	六甲山南麓	中西山遺跡	三田市	IV~V		○				●	
41		桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地	神戸市					外・扁	大阪湾		
42		保久良神社銅戈出土地	神戸市						大阪湾		
43		会下山遺跡	芦屋市	III~V		○			三翼鏡	●	
44		甲山山頂銅戈出土地	西宮市						未設定		
45	武庫川	田能遺跡	尼崎市	III~IV		○		銅剣			

●・○：出土地を表す

銅剣形：磨製石剣

銅鐸 菱：菱環鈕式、外：外縁付鈕式、○：未分析（肉眼等による）

銅鐸 菱：菱環鈕式、外：外縁付鈕式、扁：扁平鈕式、突：突縁鈕式

その他 細形・中細形・平形：銅剣、大阪湾：銅戈

表1 播磨地域主要遺跡出土遺物一覧表

神戸市新方遺跡で出土している。中期後葉には、明石川から分岐する伊川沿いの神戸市頭高山遺跡で、鉄鏃・鉋・鑿など一三点を確認している。

鉄器で注目されるのが三田盆地である。弥生時代中期後葉には、丘陵上にいわゆる高地性集落が出現し、奈カリ与遺跡で一六点、有鼻遺跡で一三点、平方遺跡で四点が出土している。この時期に一〇点を超える鉄器が確認されているのは、大規模調査が実施されたからである。本来、畿内地域の遺跡でも同程度の鉄器を保有していた。この時期は、鉄器普及が始まった段階とみている。

注目される事例を取り挙げておこう。一つは有鼻遺跡出土の鉄剣である（第3図7）。長さ二三センチ、幅二センチ、厚さ〇・八センチの完形品で、現状では近畿最古となる。もう一つが中西山遺跡の板状鉄斧である。弥生時代後期の木棺墓から出土した。長さ二三・九センチ、刃部幅四・三センチ、厚さ一・〇五センチと部厚く（第3図8）、韓半島からの舶載品の可能性が考えられる。

鉄器製作遺構は、佐用町の本位田権現谷A遺跡で発掘されている。未報告のため詳細は不明だが、

後期後半の竪穴建物床面で焼土面を検出し、五〇点あまりの鉄器等が出土した。

実は、先に挙げた奈カリ与遺跡と有鼻遺跡の竪穴建物でも赤変した焼土面は検出されていた。鉄片が出土しなかったため、発掘調査時、鉄器を製作していたと認識されなかった。が、淡路市五斗長垣内遺跡の弥生時代後期における鉄器製作跡の内容を踏まえると、これらの遺跡でも鉄器を製作していた可能性は高い<sup>8)</sup>。

ちなみに、奈カリ与遺跡の鉄鏃は、鉄板を切断し磨いて刃部を作り出していた（第3図9・10）。鉄器は、このような簡易な技術で製作されていたのである。弥生時代中期後葉、畿内地域とその周辺で、鉄器製作は始まっていたと考えている。

### （3）青銅器

青銅器では青銅製武器と銅鐸をみていこう。玉津田中遺跡では、木棺墓から細形銅剣の切っ先が出土し、戦死者の墓とされる。近畿で稀少な細形銅剣が、明石川流域にあった点を強調しておく。

銅鐸は近畿で生産された祭器である。紀元前後

までは「聞く銅鐸」であり、農耕祭器として機能した。鑄型は大阪府の東奈良遺跡・鬼虎川遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡など畿内地域で発掘されているが、播磨地域でも姫路市の名古山遺跡・今宿丁田遺跡、赤穂市上高野遺跡で発見されている。播磨地域出土の「聞く銅鐸」は、こうしたところからもたらされたと考えられる。

ところが、弥生時代後期、銅鐸は大型化し、「見る銅鐸」は、畿内地域の集団を統合する政治的シンボルに変質した。この銅鐸の製作技法から、近江地域の工人の関与が考えられているが、ここで「見る銅鐸」の鑄型は確認されていない。「見る銅鐸」の生産地は明らかになってはいないが、畿内地域の首長から播磨地域をはじめ各地域の首長に配布されたことで議論を進める。

播磨地域では、出土地不明を含め一〇点の銅鐸が出土している。型式別では、「聞く銅鐸」である菱環鈕式が一点、扁平鈕式が五点、「見る銅鐸」である突線鈕式（四式以降）が四点である。出土地が判明した七点については、「聞く銅鐸」が加古川流域と揖保川流域に分布するのに対し、「見

る銅鐸」は加古川流域でみられなくなり、市川流域から揖保川流域に収斂する。

そして興味深いことに、突線鈕四式の下本郷銅鐸（第3図11）の出土地から九キロほど離れたところに鉄器製作をおこなった本位田権現谷A遺跡が所在している。遺跡の時期は弥生時代後期後半なので銅鐸が使用されていた時期と重なり、意味があると評価している<sup>⑩</sup>。

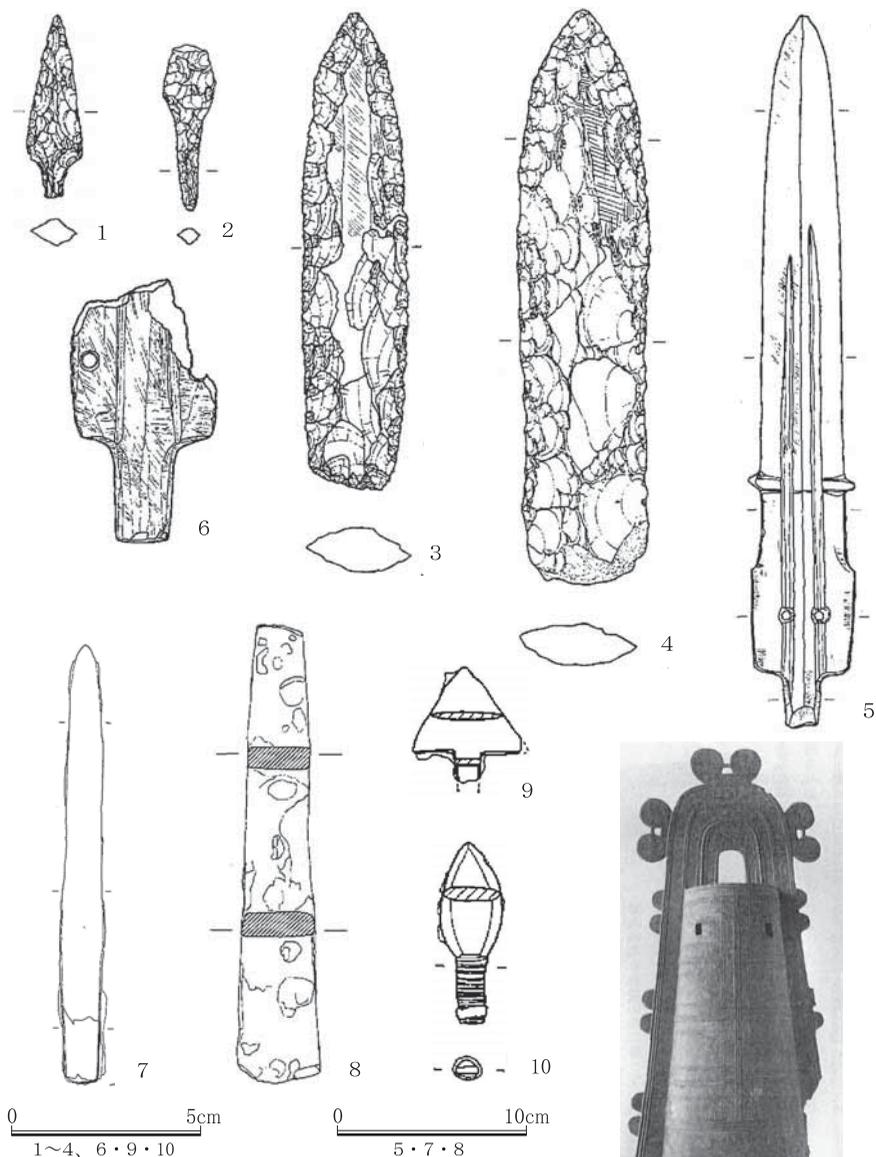
また、伊川沿いの表山遺跡では、小型仿製鏡が出土していることも確認しておきたい。

#### （4）土器

土器では、生駒山西麓産土器と近畿北部系土器をみておこう。

生駒山西麓産土器については、古くに今里幾次が注目し、弥生時代中期には加古川・明石川流域まで確認できたのが、後期になると市川・揖保川流域まで広がり、内陸の佐用町でも出土する<sup>⑪</sup>とした。この土器は、肉眼でも識別が可能で、これまでに非常に多くの研究蓄積がある。

近年、広口壺が出土する遺跡を集成するなかで、



1・2・6 亀田遺跡 3 玉津田中遺跡 4 七日市遺跡  
 5 垂水付近 7 有鼻遺跡 8 中西山遺跡 9・10 奈カリ与遺跡  
 11 下本郷 (米国 メトロポリタン美術館所蔵)

図3 播磨地域で出土したさまざまな遺物

改めて弥生時代中期の明石川流域まではセツトでの出土を確認したうえで、後期でも前半に播磨地域西部まで出土するようになり、確認した一三点のうち佐用町から七点が出土する、という整理がなされた<sup>(12)</sup>。銅鐸の使用時期より古いものの、両者の関係は、今後重要な課題となろう。

一方、近畿北部系土器については、弥生時代後期に摂津地域西部と播磨地域東部など大阪湾岸に分布が集中するが、土器は搬入品でなく、両地域の断片的な影響が及んだ折衷土器で、由良川から加古川下流を通らず、三田盆地から明石川もしくは猪名川を南下するルートが指摘された<sup>(13)</sup>。

生駒山西麓産土器は内容物を含め土器自体が移動し、近畿北部系土器は土器づくりの技術が波及した。それぞれの背景を読み取ることは難しいが、何らかの要因によって、人の移動があったと考えられている。この点については、あとで取り上げたい。

#### 四 考古資料の変遷

##### (1) 弥生時代前期から中期前葉

弥生時代前期には、新方遺跡や玉津田中遺跡、加古川市美乃利遺跡など加古川・明石川流域で金山産サヌカイトが出土する。水田稲作の伝播に伴ってもたらされたと考えられる。

一方、東からもたらされたモノとして、生駒山西麓産土器が玉津田中遺跡で確認されている。

弥生時代の開始期から、明石川流域には東西からモノがもたらされていたことになる。

##### (2) 弥生時代中期中葉から中期後葉

畿内地域で鉄器使用が始まった弥生時代中期中葉に、新方遺跡でも鑄造鉄斧が出土し、中期後葉には明石川流域、そこつながっていた三田盆地で鉄器等の出土数が増加した。

鉄器普及が本格化した弥生時代中期中葉、両地域でサヌカイトの供給量が変化した。明石川流域では中期中葉まで金山産サヌカイト優勢だったのが、中期後葉には二上山産サヌカイトが優勢となり、三田盆地では二上山産サヌカイト優勢であったのが、金山産サヌカイトが優勢となったのである<sup>(14)</sup>。

明石川流域と三田盆地は二上山の方が距離的に近いが、明石川流域では弥生時代中期中葉まで金山産サヌカイトの方が多く供給された。明石川流域の集団は、より西の集団との関係が深かったのが、中期後葉になると、河内地域など東の集団との関係が深まった。こうした地域の集団から積極的な働きかけがあったことが推測される。中期後葉という時期なので、想像をたくましくすると、鉄器入手のための動きの結果であったことを考えておきたい。

一方、三田盆地では、弥生時代中期後葉になると金山産サヌカイトの供給量が増えた。しかも、播磨地域に特徴的な「一〇（いちまる）」土坑という、床面中央に楕円形と円形の土坑を有する竪穴建物<sup>15</sup>が認められるようになる。さらには土器の製作技法についての検討も踏まえ、播磨地域からの移住があった可能性が指摘されている。

人の移住を考古学的に証明することは簡単ではないが、遺構・遺物のあり方から播磨地域と関係が強まったことは間違いない。その変化を引き起こした要因が重要で、中期後葉という時期を踏ま

えると鉄器の普及との関係を考えたいところである。だが、人の移動を引き起こした理由を見出せないし、何でも鉄器と関係づけるのも問題だろう。ここでは、社会の変化によって、播磨地域から三田盆地に人の移動があったことを指摘するに留めておきたい。

### （3）弥生時代後期前半

弥生時代後期になると、中期後葉まで低地に所在していた大規模環濠集落にかわり、丘陵上に大規模な環濠集落が出現した。大阪府古曽部・芝谷遺跡や徳島県カネガ谷遺跡はその例で、ともに鉄器が出土し、後者には小型仿製鏡もある。

播磨地域では、表山遺跡がこの時期の集落に該当し、鉄器とともに、畿内地域とその周辺でもっとも古い小型仿製鏡が出土した。<sup>16</sup>

明石川流域では弥生時代中期より鉄器及び青銅器（以下、「鉄器等金属器」という。）の出土が数及び質的に顕著だが、それは後期も同様であった。

### （4）弥生時代後期後半

この時期に、突線鈕四式以降の銅鐸が播磨地域西部で分布するようになる。

また、近畿北部系土器の影響が明石川流域に及ぶことにもなった。土器の搬入ではないが、モノの流れの方向が、東西方向、あるいは瀬戸内海側からの北上ではなく、これまでになく日本海側からの南下となったことになる。

## 五 播磨地域の弥生の道とその社会

### (1) 物流の十字路である明石川流域(図4)

明石川流域には、西からも東からもモノが集まったが、加古川下流域はどのような状況だったのだろうか。加古川市の坂元遺跡、古くに発掘された東溝遺跡などで鉄器等金属器の報告はない。まったく保有しなかったことはないが、現状は、加古川ではなく明石川流域に出土が顕著で、それは、当時の実態を反映しているとみている。

明石川流域の集落は、弥生時代をとおして土器・石器・鉄器等金属器などの流通拠点として役割を果たしていた。しかも、明石海峡を通過するにあた

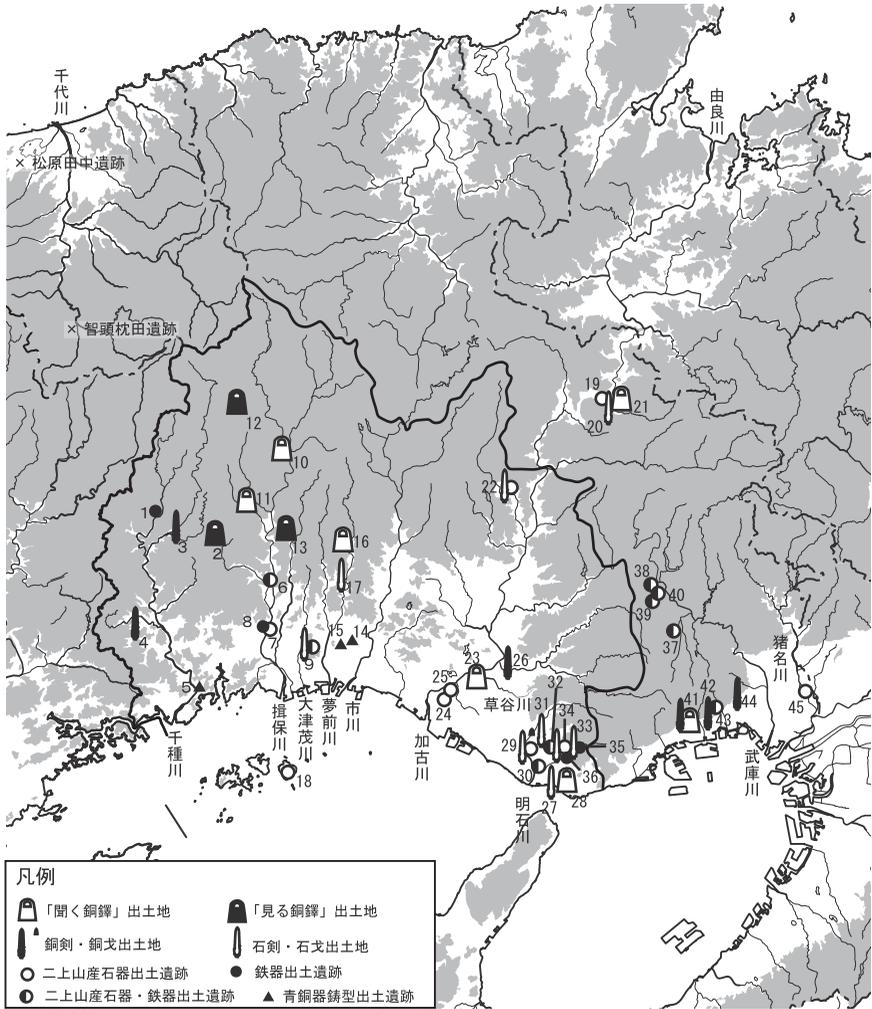
ては、海のみならず伊川谷を通る陸の道と川の道もあった<sup>1)</sup>。伊川と明石川との合流点に位置する新方遺跡は、流通拠点の中心であったことを強く示唆している。

では、ここで明石川流域のモノの流れを理解するため、周辺地域の道についてもみておこう。

明石川流域の集落が流通拠点となったのは、淡路島の存在、本州と淡路島間の明石海峡の存在という地理的要因であったと考えている。

その淡路地域だが、弥生時代中期までの銅鐸・武器形青銅器は南部に集中する。南部には平野が開けていたことと関係があるのだろう。ところが、後期になると、丘陵が卓越する北部に多くの集落が密集して出現し、五斗長垣内遺跡や舟木遺跡などの鉄器製作遺跡も成立してくる。舟木遺跡からは中国鏡片も出土している。

つまり、淡路地域では鉄器等金属器の中心が南から北へ移動したことになる。淡路島には北に明石海峡、南に鳴門海峡があり、ともに海の難所であったが、ともに東西をつなぐ海の道として機能したことは言うまでもない。南部から北部に中心



- 1本位田権現谷A遺跡 2下本郷銅鐸出土地 3平松五郎山銅劍出土地 4別名前山銅劍出土地 5上高野遺跡 6新宮宮内遺跡 7寄井遺跡 8小神芦原遺跡 9亀田遺跡 10間賀銅鐸出土地 11青木中井小谷銅鐸出土地 12岩野辺穴尾銅鐸出土地 13須賀沢銅鐸出土地 14名古山遺跡 15今宿丁田遺跡 16神種銅鐸出土地 17梅谷石劍出土地 18大山神社遺跡 19七日市遺跡 20棚原石劍出土地 21野々間銅鐸出土地 22宮ヶ谷・長坂谷遺跡 23上西条（望塚）銅鐸出土地 24坂元遺跡 25美乃利遺跡 26正法寺山銅劍出土地 27垂水付近石劍出土地 28垂水区投上銅鐸出土地 29玉津田中遺跡 30新方遺跡 31養田中ノ池遺跡 32頭高山遺跡 33西神NT第38地点遺跡 34西神NT第50地点遺跡 35西神NT第62地点遺跡 36表山遺跡 37北神NT第4地点遺跡 38有鼻遺跡 39奈カリ与遺跡 40中西山遺跡 41桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地 42保久良神社銅戈出土地 43会下山遺跡 44甲山山頂銅戈出土地 45田能遺跡

図4 播磨地域及び周辺地域主要遺跡分布図

が移ったのは、社会全体の分業の進展、物資流通において明石海峡がより重要な意味をもつようになるなど社会の変化が考えられる。

<sup>(18)</sup> 近畿北部系土器は淡路地域南部でも出土している。明石海峡は南北の道としての役割も、果たしていた。

次に、明石川流域から草谷川經由でつながっていた三田盆地への道もみていこう。西からのルートでは、加古川河口から遡上するルートもあつただろう。

問題は東からのルートで、大阪湾側より遡上するルートとしては、まず三田盆地と直接つながる武庫川ルートが考えられる。ただし、この川は途中で非常に急峻な崖となり、陸の道も含め行き来は困難であつたことが想像できる。だとすると、もう一つ候補となるのが猪名川ルートである。この流域には弥生時代中期に二上山産サヌカイトが多数出土した川西市加茂遺跡が存在する。後期後半には近畿北部系土器が、三田盆地から猪名川流域に分布するという指摘<sup>(19)</sup>もある。こうしたことを踏まえると猪名川ルートによる三田盆地への道は

蓋然性があるように思われる。

さて、その弥生時代後期後半で気になることがある。瀬戸内地域からの影響を受けた土器の技法を整理すると、中期後半以降、後期中葉まではその地域から一定の人の移動が想定されたのが、後期後葉にはその動きが認められなくなるというのである。<sup>(20)</sup> このことは、瀬戸内地域との関わりが弱まったこと、人の動きやモノの動きが停滞したことを考えさせることになる。鉄器等金属器の流通が本格化していたにもかかわらず、である。

そのような時期に、再三取り挙げてきたが、近畿北部系土器の影響が、明石川流域そして猪名川流域で認められるようになった。近畿北部から、何らかの形で人の移動、それに伴って何らかのモノの移動があつたことを想定することになる。玉類など考えられる対象はいくつもあるだろう。だが、この二つの地域の土器のあり方に変化があつた背景として鉄器等金属器の供給ルートに変化があつたことが、もっとも蓋然性の高い解釈だと考えている。<sup>(21)</sup>

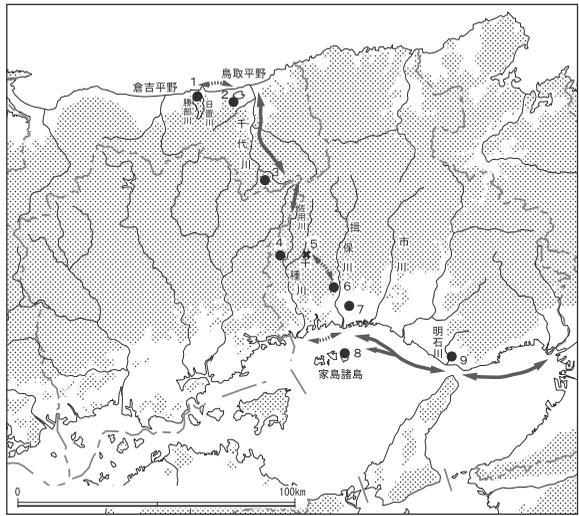
そうだとすると、この時期、明石川流域の集団

は鉄器等金属器の流通に、東西の道ではなく南北の道により関与していたことになる。その後、終末期には、吉備系土器が河内地域、生駒山西麓山の土器が吉備地域で出土するようになる。再び、瀬戸内海は東西の道として機能するようになった。播磨地域の東端に位置する明石川流域の集団は、鉄器等金属器の流通において、東西交通、南北交通の拠点であり、まさに、物流の十字路としての役割を果たしていたのである。

(2) 佐用町を抜ける南北の道 (図5)

播磨地域西部の道については、二上山産サヌカイトによって、佐用町域から智頭町域を経て日本海へ抜ける道と考えた。しかし、まずもって、瀬戸内海側の起点と想定される姫路市域で、その出土を確認できていない。現状では、姫路市域から陸の道を通る場合と、揖保川河口から遡上する場合が考えられる。

二上山産サヌカイトは未確認だが、興味深いのは鳥取県智頭枕田遺跡である。この遺跡では弥生時代前期に吉備系と播磨系の土器が出土し、中期



1 青谷上寺地遺跡 2 松原田中遺跡 3 智頭枕田遺跡 4 本位田権現谷A遺跡 5 下本郷銅鐸出土地  
6 新宮宮内遺跡 7 亀田遺跡 8 大山神社遺跡 9 五津田中遺跡

図5 播磨地域と因幡地域を結ぶ道 (佐用—千代川の道) 復元図

後葉にも揖津地域でみられる壺等が認められ、瀬戸内海側からの影響が及んでいた。

こうした点を踏まえ、この道を現時点では暫定的に「佐用 千代川の道」と呼称しておく。二上山産サヌカイト等の確認によって、将来的には揖保川が千種川など川の名称をつけたい。

そのルート付近で鉄器製作がおこなわれ、突線

鈕式銅鐸が埋納されたのである。

「聞く銅鐸」は、播磨地域では突線鈕四式以降のものが出土するのに対して、吉備地域では突線鈕式三式までのものしか出土していない。これについて、突線鈕式三式の製作時期である後期中葉頃まで、畿内地域の政治勢力は吉備地域のそれと連携を模索していたが、後期後半にはその動きをやめ、吉備地域と播磨地域の間に境界を意識し始めたという見解がある。<sup>(23)</sup>興味深い考え方である。

見方を変えると、播磨地域の政治勢力は、畿内地域と吉備地域の間に位置し、どちらの勢力と関わるかという選択を余儀なくされたことが想像される。そうになると、鉄器等金属器の供給が問題となってくる。政治的な関係に経済的な関係も影響するのかがどうかまで明らかにはできないので、これ以上深めることはできない。だが、瀬戸内海による東西の道が十分に機能しなくなる事態が起こっていたことから、この道が鉄器等金属器の流通ルートになった可能性を考えたいところである。

なお、弥生時代終末期には、生駒山西麓産の土器が鳥取県域で出土し、古墳時代前期には伯耆系

の土器が、姫路市丁瓢塚古墳、神戸市西求女塚古墳で出土している。<sup>(24)</sup>佐用 千代川の道は、その後も機能していたことを示す現象である。

おわりに

後半は類推に類推を重ねたもの、という意見も出てこようが、播磨地域の道を復元し、移動したモノについて言及した。本稿をまとめるにあたり、興味深いのは佐用町である。内陸部だが、生駒山西麓産の土器、突線鈕式銅鐸が出土し、鉄器製作遺構もあり、佐用 千代川の道と考えた。

佐用町と言えば、古代においては姫路市域から美作道が始まり、ここで因幡へ抜ける因幡道と分岐する。文献史の研究を短絡的に結びつけることは慎まなければならないが、この道は、弥生時代にはすでに開通していたことになる。谷あいの道なので、ある意味、当然ということになるのかも知れないが。

さらに付言すると、美作道は出雲道につながり日本海に抜ける。その道が弥生時代に存在したこ

とを示す考古資料は基本的にない。ただし、気になる資料がないわけではない。島根県青木遺跡で出土した突線鈕式三式銅鐸の破片である。そもそもは完形品がもたらされただろうが、ルートとして、佐用 千代川の道を経た海の道と、陸の道ならば、この道が機能したことを想定することになるからである。今後の課題としたい。

ここまで、播磨地域の弥生時代に三つの道について考えてきた。そもそも道は生活という社会的・経済的要因でつくられたが、古墳時代以降は政治的な要因で新たな道がつけられることもあり、古代には視覚に訴える形で整備された。弥生時代の道とその前後の時代の道との比較という視点は興味深く、改めて考えてみたい。

注

- (1) 筆者は古代の国の領域を示すにあたっては、国名に「地域」を付けて呼んでいる。以下、畿内と旧国の領域を示す場合、「地域」を付して呼ぶこととする。
- (2) 荒木幸司「弥生時代の「境界」」(みずほ別冊 弥生研究の群像 七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念『近畿弥生の会、二〇一三年』。

(3) 佐原眞「大和川と淀川」(『古代の日本』五 近畿 角川書店、一九七〇年)。

(4) 喜谷美宣「弥生時代の東播磨」(『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会、一九八二年)。

(5) 種定淳介「加古川と田良川 モノの移動について」(『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会、一九八九年)。

(6) 禰宜田佳男「近畿における鉄器化の再検討」(『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社、二〇一九年)。

(7) 禰宜田佳男「境界」に位置する青谷上寺地遺跡」(『白兔のクニへ 発掘された因幡のあけぼの』大阪府立弥生文化博物館、二〇一〇年)。

(8) 禰宜田佳男「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」」(『新・日韓交渉の考古学 弥生時代』「新・日韓交渉の考古学 弥生時代」研究会・「新・日韓交渉の考古学 青銅器」原三国時代」研究会、二〇一〇年)。

(9) 難波洋三「近畿式・三遠式銅鐸の成立」(『古代アジアの青銅器文化と社会 起源・年代・系譜・流通・儀礼』国立歴史民俗博物館、二〇〇六年)。

(10) 禰宜田佳男「近畿弥生社会における鉄器化の意義」(『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社、二〇一九年)。

(11) 今里幾次「播磨の雲母土器」(『考古学研究』第二三巻第四号、考古学研究会、一九七七年)。

(12) 桐井理輝「生駒西麓産胎土をもつ広口壺について」

〔古墳出現期土器研究〕古墳出現期土器研究会 二〇一九年。本位田権現谷A遺跡は後期後半で、桐井の指摘した時期と異なる。この点を含め、詳細は今後の課題である。

(13) 桐井理輝「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」(『京都府埋蔵文化財論集』第七集、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、二〇一六年)。

(14) 葦科哲男・丸山潔・東村武信「サヌカイトの流通から見た弥生時代摂津国境地域の交流関係」(『昭和六一年度神戸市文化財年報』神戸市教育委員会、一九八九年)。

(15) 山崎敏昭「峠を越えて 弥生時代中期畿内西周辺部の地域性」(『伊達先生古稀記念 古文化論叢』伊達先生古稀記念論集刊行会、一九九七年)。

(16) 森岡秀人「弥生時代抗争の東方波及 高地性集落の動態を中心に」(『考古学研究』第四二巻第四号 考古学研究会、一九九六年)。

(17) 注2文献。

(18) 定松重・的崎薫「淡路・三原平野周辺の弥生時代遺跡の動向」(『淡路島松帆銅鐸と弥生社会』雄山閣、二〇一九年)。

(19) 注13文献。

(20) 西谷彰「弥生時代における土器の製作技術交流」(『待兼山論叢』史学篇三三、大阪大学文学研究科、一九九九年)。

(21) 注10文献。鉄器が南北ルートでもたらされたとい

う考え方は福永伸哉がすでに、由良川から亀岡盆地へ抜けるルートを示している。福永伸哉「弥生時代の転換期と七日市遺跡」(『七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館、二〇〇〇年)。

(22) 濱田竜彦「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」(『古代文化』第六〇巻第三号 古代学協会 二〇〇八年)。

(23) 福永伸哉「前方後円墳成立期の吉備と畿内 銅鐸と銅鏡にみる地域関係」(『吉備と邪馬台国 霊威の継承』大阪府立弥生文化博物館、二〇一三年)。

(24) 古屋紀之「古墳出現前後の葬送祭祀 土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理」(『日本考古学』第一四号 日本考古学協会、二〇〇二年)。

【断り】紙幅の関係で、注は本稿の趣旨に関わるものを中心とし、使用した発掘調査報告書等は割愛した。

【謝辞】本稿は、二〇二〇年二月九日の第一三回東播・西摂研究会で発表した内容に、その後の知見を加えて文章化したものである。執筆に当たり、下記の方々には研究会当日にご意見・ご教示をいただき、資料調査・文献探索でお世話になり、図表作成等でご協力いただいた。秋山浩三・荒井順子・荒木幸司・上田健太郎・坂江渉・中村弘・菱田淳子・古市晃・三好孝一・森岡秀人・山本誠(敬称略)。記して感謝いたします。